



「怒る」と「叱る」と ~いつの間にか体罰を防ぐために~

「怒る」と「叱る」の違いっていったい何だろう…

この2つは「いつの間にか体罰」になることもあります。

今回は「怒る」と「叱る」の違いについて考えます。

「怒る」と「叱る」の違いとは

「怒る」と「叱る」は違うとよく言われていますが、言葉の意味はそれぞれ次のようにになります。

◆「怒る」：自分の感情を相手にぶつけること ◆「叱る」：相手に対して助言・アドバイスをすること
要は、自分の感情が入っているかどうかの違いらしいです。【怒る】は、自分のイライラなどの負の感情が入っているためよくないとされ、【叱る】は、冷静に相手を良い方向に導いていくことで大切と言われています。

正しく「叱る」ことできますか？

ところで、みなさんは正しく「叱る」ことができますか？冷静に良い方向に導くことができますか？この問いに、私は、正直自信がありません。きっと叱るときには、きつい口調でマイナスなワードを使い子どもを責める、「叱る」という名の「怒る」になってしまう気がします。なので、私は「叱る」という手段を極力使いません。叱るときは「児童が命に関わる危険な行為をしたとき」と「誰かの心身を一方的に傷つけたとき」と決めています。

「叱る」ときはどんな時？

「叱ってしまった」ときを振り返ってみてください。きっと、その子の言動で、「授業や活動が思う通りに進まなかつた時」や「予想外の言動をされたとき」が多いのではないでしょうか？しかし、それは、【自分の想定や考えの不十分さ】と【指導の手立てやバリエーションの不足】で起きたことと捉えなければいけません。子どもたちに「それはいけません」と叱る前に、自分自身の指導を見つめなおす必要があるはずです。

「叱ってしまった…」ときには

それでも、思い余って叱ってしまうこともあります。その時は必ず、「叱る以外にどういう手立てで指導すればよかつたのか」と自身の指導力不足を反省するとともに、【叱った以上に良いところを見つけ「褒めて」】あげてください。そのことで、叱ったことが無くなる訳ではありませんが、自分自身のこれから指導と子どもたちの心を癒す【回復の種】にはなるのではないかと思います。

子どもの心は繊細であり、叱ることや厳しい指導を受けると、【主体性や自己肯定感の喪失や攻撃的行動が増強】することが明らかになっています。ぜひ、叱らない指導を心がけてください。

まとめ

【叱る指導】は劇薬と同じです。即効性はあるがすぐに効かなくなり、徐々に強い指導となり、最後には子どもの心を壊していく。その末路として【不適切な指導】や【体罰】へ身を投じさせてしまうことになります。

「令和の日本型学校教育」は、子どもの主体性を大切にした教育であり、「させる指導」ではないはずです。まじめで正義感の強い教師ほど「教えるのが教師」と思いがちですが、「教える」前に、考えや手立てがその子の主体性を引き出すかどうか、自分に問い合わせから指導してほしいと思います。